

たましいは生きている

小川未明

青空文庫

むかしひと
昔の人は、月日を流れる水にたとえましたが、まことに、ひと
ときもとどまることなく、いづくへか去つてしまふものです。そ
して、その間に人々は、喜んだり、悲しんだりするが、しんけ
んなのは、そのときだけであつて、やがて、そのことも忘れてし
まいます。

この話も、後になれば、迷信としか、考えられなくなるとき
があるでしょう。

* * * * *

わたしの兄は、音楽が好きで、自分でもハーモニカを吹きま
した。海辺へいっては砂の上へ腰をおろして、緑色のあわ立

ちかえる海原うなばらをながめながら、心こころゆくまで鳴ならしたものでした。無心むしんで吹ふくこともあつたし、また、はてしない遠とほくをあこがれたこともあつたでしょう。それは、夕日ゆうひが花はなのごとく、美しくもえるときばかりではありません。灰色はいいろの雲くもが、ものすごく低ひくく飛とび、あらしの叫さけぶ日ひもありました。

「正しょうちゃん、この海うみの合奏がっそうは、ベートーベンのオーケストラに、まさるともおとらないよ。人間にんげんが、いくらまねようたつて、自然ぜんの音楽おんがくには、かなわないからね。」と、兄あには、いいました。
戦争せんそうが、だんだん大おおきくなつて、ついに、兄あにのところへも召し集ようしゆうれい令れいがきました。わたしは、その日ひを忘わすれることができま
せん。いままで、たのしかった、家いえの中なかは、たちまち笑わらいが消きえ

てしまつて、兄は、自分の本箱や、机のひきだしを、片づけは
じめました。

「いけば、いつ帰るかわからないから、ハーモニカを正ちゃんに、
あずかってもらうかな。」

こうきくと、わたしは、兄の気持ちを考えて、しぜんと涙がわ
きました。

「にいさんが、帰るまで、なんでも、そのままにしておくよ。」
「いや、もつと戦争が、はげしくなれば、この家だつて、どう
なるかしれんものね。」

兄は、無事で帰れたなら、また勉強強をはじめるともりだつ
たのでしよう。英語の辞書も、いつしよに渡しました。

しかし、兄は、それぎり帰つてきませんでした。兄の船は、南方へいったというわさでしたが、出発後、なんのたよりもなかつたのです。

わたしは、海辺に立つて、はるかな水平線をながめて、ハイモニカを吹きました。入り日の前の空に、さんらんとして、金色のししのたてがみのような雲や、また、まっ赤な花のような雲が、絵模様のように、飛ぶことがありました。兄は、こんなやうなたそがれが、大好きであつたと思うと、いまごろ、どこかの島で、この空を見てるのでなからうかと、ひとりで、目の中にくもることがありました。わたしは、せめて、この真心の、兄に通ずるようと、ハイモニカを吹いたのでした。

また、あらしの日にも、兄のしたごとく、浜辺へ出て、鳴らし
ました。しかし、兄のハーモニカが、ここにありながら、それを
愛する兄の、いないということは、考えるとさびしいかぎりでし
た。

その翌年の夏には、公報こそ入らなかつたけれど、兄の戦
死は、ほぼ確実なものとなりました。

ある日、わたしは、波打ちぎわで、清ちゃんと遊んでいました。
「波は、生きていますよ。」と、清ちゃんが、いったので、わたし
は、

「生きていますって、たましいがあるというの。」と、ききかえし
ました。

「うそと思うなら、石を投げてごらん。怒って、大きくなるから。」と、清ちゃんは、ふしぎなことをいうのです。

わたしは、石をひろって投げました。つづいて、清ちゃんが、なげました。ふたりのすることを、せせら笑って見ていた、白い波が、だんだん高く頭をもたげて、急にふたりの足もとをおそいました。

「ほら、おこった！」と、清ちゃんが、叫びました。

わたしは、むちゆうになつて、石をひろつては、できるだけ沖へ近づいて投げると、もくら、もくらと、海はふくれ上がり、大波が、わたしの足をさらおうと、やってきたので、あわてて逃げました。そのとき、砂の上へおいたハーモニカを持っていつて

しまいました。

わたしは、波なみが、またハーモニカを返かえしてくれはしまいかと、

しばらく立たつて、待まつていたが、それは、ついにむだでした。

月つきの明あかるい晩ばんでした。わたしは、窓まどに腰こしをかけて、どこかで鳴

く虫むしの、かすかな声こえをきいていました。秋あきの近ちかづくのを感じかんじたの

でした。すると、たちまち、ハーモニカの音ねがしたのでした。

「あれは、だれがふいているのだろう。」と、こんどは、そのほ

うへ気きをとられました。吹ふいている人ひとは、歩あるいているのか、その

音ねは、近ちかくなったり、遠とほくなったりしました。

「にいさんじゃないか。」と、わたしは、立たち上あがりました。あ

まり、しらべが、よくにっていたからです。外そとへ出でてみようとする

うちに、ハーモニカの音は、やんでしまいました。

まだ、そのうたがいの解けぬ、二、三日後のことでした。わたしは、赤く夕日が、海へ沈むのをながめていました。すると、うしろの砂山のあたりで、ハーモニカの音がしました。その吹き方が、兄そっくりなので、わたしは、はつとして、このときばかりは、全身があつくなりました。

「だれだか、見てやろう。」

ただ、むやみとそのほうへ、足にまかせて、かけ出したが、いっつか、音も消えれば、さつきまで、ちらほらしていた、人影まで、どこへやら去って、見えなくなつたのです。

わたしは、家に帰って、このことを母に話しました。

「それは、氣きのせいです。あまりおまえが、にいさんを思うおもから。」と、母ははは、いいました。

しかし、わたしは、氣きのせいだとは、信しんじられませんでした。けれど、それいじょう以上いじょういい張はることは、できませんでした。ところが、なんとおどろくことには、こんどはうず巻まく波なみの中なかから、兄あにの吹ふく、ハーモニカのしらべがきこえたのです。わたしは、さつそく、清せいちゃんを呼よんできました。清せいちゃんは、いつになく、まじめくさつて、耳みみをすましました。

「きつと、正しょうちゃんのなくした、ハーモニカをお魚さかなが、小ちいさな口くちで吹ふいているんでないか。」といいました。

その後ごも、わたしは、ひとりなぎさに立たって、ぼんやりと海うみを

ながめることがありました。あるとき、知らない男おとこの人が、わたしのそばに立たつて、じつと沖おきの方ほうをながめていました。顔かおの色いろは、日にやけて黒くろく、その目めは、とび出でているようで、いくらか、こわい気きがしました。お寺てらへいくと、よくこんな形かたちをした、木像もくぞうの仏ほとけさまがあるのを、わたしは思おもい出だしました。こちらが、やさしくものをいったら、怒おこりはしないだろうと、考かんがえたので、

「おじさんは、なにを見みているの。」と、ききました。すると、怒おこるどころか、うちとけて、わたしを見みながら、

「あちらの島しまに、まだ残のこっている、戦せん友ゆうのことを思おもっていたんだよ。」と、その人ひとは、答こたえました。

「まだ、かえらないの。」

「土つちの中なかで眠ねむって、永えい久きゆうに帰かえらないのさ。」

「おじさんは、いつ復ふく員いんしたの。」

わたしは、すぐおもに兄あにのことを思おもい出ださずにいられませんでした。

「まだ、一ひと月つきばかりにしかならない。いくら苦くるしんでも、こう

して、帰かえられたものは、しあわせだが、いつまでたっても、もど

らない戦せん友ゆうはかわいそうだ。」

これをきくと、わたしは、情なさけ深ふかい人ひとだと思おもったから、

「おじさん、ぼくの兄あにも戦せん死ししたんです。」といいました。

「やはり、そうか。」と、急きゆうに暗くらい顔かおになつて、うなずきました。

いつか、ふたりは、ならび合あつて、砂すなの上うえに腰こしをおろし、海うみの方ほう

を向むいていました。

「ぼく、いつも、ここに立^たつて、にいさんを思^{おも}うんですよ。」と、わたしが、いうと、その人^{ひと}は、目^めを足^{あし}もとへ落^おとして、やはりうなずくばかりでした。

「人^{にんげん}間は死^しんでも、靈^{れいこん}魂^{こん}は、生^いきているのではない？」と、わたしは、ふしぎなハーモニカの音^ねから、おじさんに、こうたずねたのでした。あるいは、戦^{せん}地^ちにあつて、それを経^{けい}験^{けん}したとも、かぎらないと思^{おも}ったからです。おじさんは、しばらく、なにか考^{かんが}えているようなようすだったが、やがて、顔^{かお}を上^あげると、

「それについて、ふしぎなことがある。」といいました。

「ふしぎなことって、どんなこと。」

「ゆうれいとても、いうんだらうな。」

「えつ。」と、わたしは、びつくりしました。

このとき、つめたい風が、海の上から、さつと陸へ向かつて、走つたように感じました。

おじさんは、口を開きました。

「前線へ、伝令にいった兵士が、帰りの山の中で道を迷つてしまつた。困つていると、ふいにくつ音がしたので、まさしく、敵に出会つたと、身がまえすると、思いがけない、親友だつたので、二度びつくりした。あまりおそいので、こんなことではないかと迎えにきたよ。さあ、暗くならぬうち、早くいこうと、戦友は、先に立つて、よくこんな道を知っているなど思うようなところを歩いた。だが、かれはこのあいだの戦争で死んだので

はなかつたかと気がついたので、休んだら聞こうと思っ
ているうち、その姿を見失ってしまった。それと同時に、ふもとの
軍馬のいななきをきいたというのだ。」と、おじさんは、話
しました。

「靈魂が、親友を救ったのですね。」と、わたしは、その話
に感動したのでした。そして、わたしは、兄の吹く、ハーモニ
カの音が、このごろ、たびたびきこえると、いいますと、

「きつと、きみのにいはんは、家のことを思っ
ていられるのだらう。」と、おじさんは、答えました。

「そうしたら、どうすればいいの。」と、わたしは、ききました。
「せいぜい、にいはんの好きなことをしてあげて、靈魂をなぐ

さめるんだね。」と、おじさんは、いいました。

そのことを、わたしに教おしえてくれた、おじさんは、どうしたのか、その後ごふたたび見みることができませんでした。

わたしの兄あには、なにより平和へいわを愛あいしました。だから、音楽おんがくがすきでした。わたしは、父ちちにねがって、兄あにのもっていたのと、同じおなハーモニカを買かってもらいました。そして、それを吹ふくときには、かならず、兄あにの気持きもちちになろうとしました。

わたしの兄あには、自然しぜんを愛あいしたし、また、だれに対たいしてもしんせつで、なにをするにも、やさしみの心こころをもっていました。

わたしは、海岸かいがんへいくと、まず、兄あにのしたごとく、砂すなの上うえへ腰こしをおろしました。そして、ハーモニカを吹ふきました。このとき、

空そらを飛とぶ雲くも、打うちよせる波なみ、しきりと顔かおへあたる風かぜ、ともどもに、
申もうし合あわせたごとくたたずんで、

「ききおぼえのある、なつかしい音ねだ。」と、いつているようでした。

わたしは、ますます、兄あにの目め、兄あにの心こころをもつてきました。すると、かれらは、

「あれを吹ふくのは、弟おとうとか、兄あにそっくりじゃないか。また、この浜まべへも、昔むかしのような平和へいわが、やってきたな。」と、ささやき合あっているのです。

わたしの真まごころ心こころで、兄あにのたましいも、はじめて、なぐさめられたものか、ふしぎなハーモニカの音ねも、それ以来いらいしなくなつたの

でありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たましいは生きている」桜井書店

1948（昭和23）年6月

※表題は底本では、「たましいは生《い》きている」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

たましいは生きている

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>